闘う弁護士・西村國彦の

ゴルフ文化産業論

21

アイスランドの奇跡（その5）

西村國彦（にしむら・くにひこ）
お酒は飲めないしカラオケも駄目の営業下手の弁護士。そんな男が40歳を迎える年、ゴルフを始めたことから人生も性格も激変。ゴルフ大好き仲間を求めるオデッセイになって、世界を放浪。ゴルフエッセイも書く傍ら、法的に弱いゴルフ場会員たちの権利を守るため、「新理論」を構築。ハゲタカ外資にも正面から闘いを挑み、撃破。最近、ジャズの世界も覗いている。日本ゴルフジャーナリスト協会理事。

目次

その1　日本人が諦めていること、ほか（2019年11月号）
その2　鍋とフライパン革命の意味、ほか（2019年12月号）
その3　近未来の組織問題は世界の課題、ほか（2020年1月号）
その4　今なぜ「美意識」が必要なのか？ほか（2020年2月号）
その5　（本号）

1　サイエンス重視から哲学・アート重視への変更理由①

企業経営に「美意識」の必要性を訴えるナレッジキュレーターの山口周氏によると、理由の第1は「論理的・理性的な情報処理スキルの限界が露呈しつつある」という。その要因はふたつ。

ひとつ目は、みんなが他人と同じ正解を出すスキルを身につけたことで、問題解決能力が評価されなくなったこと。団塊世代の役割も考える時期が来たのだ。

ふたつ目は、世界はいま、不安定・不確実・複雑・曖昧ないわゆるVUCAワールド化している（註1）ことから生ずる。いたずらに論理的・理性的であれば、合理的判断がしにくくなり、意思決定はなされず、まともな経営はできなくなること。

わかりやすく言うと、こんなことだろうと思う。

事件解決を担う僕たち弁護士にもいろんなタイプがいる。

生の事件は、麻の葉が絡み合ったようなものだ。つまり、どことどこがつながってるのか見えず、どこかを引っ張るととんでもないところが動いてしまうようなもの。不安定で不確実で、複雑で曖昧にも感じられる生き物のようなものだ。

大胆で勇気があり、かつカンのいい弁護士は、しばらく眺めているうちに、はさみを取り出し、あっという間に、数カ所切ってしまう。すると、解決策が見えてくるのだ。腐りかけた木の橋でも叩いて渡ろうとするタイプだろう。

他方むかしの僕みたいに、石橋を叩いても渡らない弁護士もいる。

なかなかハサミは持ち出さず、あちこちから眺めることしかしないわけだ。しばらくは、ノートをとり、写真撮影や写生をして、その眺めを分析することに集中するタイプだ。

日々決断を必要とする企業経営者に要求されるのは、絶対に若いころの僕のようなやり方ではありえない。

企業は生き物だから、前者のような、「全体を直感的に捉える感性」と「真・善・美が感じられる打ち手」を自らの内部から出していける構想力や想像力が、経営者に求められるというわけだ。

考えてみればこれは、ゴルフのショットと同じではないか。コースという現場はめまぐるしく変わる風や天候と地形や他の選手のスコア変動など、まさにVUCAワールドそのものだろう。

一定の時間内に、ショットを打たなければならないゴルファーには、企業経営者と同じく「全体を直感的に捉える感性」が必要なのだ。

タイガー・ウッズが強く魅力的なのは、この「美学」が感じられる選手だからだ。

2　サイエンス重視から哲学・アート重視への変更理由②

（1）「自己実現的消費」とは？

山口氏が主張する第2の理由は、世界中が経済成長を望むいま、世界中の市場が「自己実現的消費」へと向かいつつあることだ。わかりやすく言うと、生存を維持するレベルではないモノがあふれる時代、人間の欲求が大きく変化している以上、消費の性格が大きく変化したということ。

そんな市場では、ほかの人から認めてもらいたい気持ちや、自分らしい生活をしたい気持ちに訴えかける感性や美意識が重要だということのようだ。

欲求5段階説のエイブラハム・マズローによると、人間の欲求は、①「安全で快適な暮らしをしたい」安全欲求、②「集団に属したい」帰属欲求、③「他者から認められたい」承認欲求から最終的には、④「自分らしい生き方を実現したい」自己実現欲求に変化していくという。

そんな世界では、企業やリーダーの「美意識」の水準が、注目されるというわけだ。

（2）つくられる「消費者の欲求」

確かに、そういう傾向は明らかだ。但し、指摘しておくべきは、そのような消費者の欲求は、垂れ流される広告、特にテレビコマーシャルによって、市民たちにすり込まれただけではないのだろうか。

そのような欲求はもともとあるものではない。そのような方が気分が良くなることから、商品を買わせるよう催眠術的に錯覚を生じさせるような広告手法がまかり通ってきたことに原因があると思う。

ゴルフコースも美学と哲学の表現かもしれない。ストリームソング　ブルー　byトムドーク

日本での「原発安全神話」は、熱しやすく冷めやすい日本人の特性も相まって、徹底している。

官民ともにその呪文は解けにくい現実は、極東の島国というところから説明するしかない気もする。

理由の3は、システムの変化にルール制定が追いつかないことだが、この点は次回詳述しよう。

組織や社会を変えるには？

今話題のゴーンさん元弁護人弘中氏を有名にした村木厚子さんが書いているいい話（註2）。大学でこの話をすると、学生たちは、「世界は一人で変えられる」ことに気づくという。
バングラディシュの貧困層対象銀行「グラミンバンク」では、借り手5人ひと組グループの連帯保証に基づき融資を行い、短期間で返済を受けるという。このモデルは、貧困な人たちに自立できる機会を与え、経済的な発展を導く手段として評価された。2006年、考案者の経済学者ムハマド・ユヌス氏とこの銀行には、ノーベル平和賞が授与されたという。
お金をあげるという発想から、お金を貸すことで自立を助ける発想へ切り替えするだけで、こんなインパクトあることが可能なのだ。おかしいぞ、と思ったら、人ごととしてではなく「自分事」ととらえ、自分で動けば世界は変わる。

（註1）不安定・不確実・複雑・曖昧を意味するVOLATILITY・UNCERTAINTY・COMPLEXITY・AMBIGUITYの頭文字をとって、VUCAワールドという。

（註2）2018年角川新書「日本型組織の病を考える」より